



「(人・もの・ことに)主体的にかかわり、仲間とともに伸びようとする子」を育てる



【勇壮な火の舞い】



【勇気・友情・感謝の火を】

今年度の5年「緑の学校」は、夏休み前に実施しました。昨日、帰ってきたばかりですが、大きな行事を通して、一段とたくましく成長し、学年の絆をよりいっそう固いものにしてきました。

どの学年の子も4月以来、日々登校し、それぞれ様々な挑戦をし、時に仲間と共に乗り越えてきました。ここまでがんばり通したお子さんを、今日はしっかり褒めてあげてください。

さて、太平洋高気圧が本格的に張り出すと、いよいよ夏本番。子どもたちは明日から夏休みで、意気盛んです。今は、こんな夏休みにしたいなと考えるのが楽しい時だと思います。夏休みは自由になる時間が多いので、その時間を自分でどう使うか考えて、生活できるといいと思います。いついつまであれ、いついつまでこれと、小さなゴールをいくつか作っておくといいかもしれません。自由研究・工作に挑戦する、好きな本を読む、地域行事に参加する、家のお手伝いをする、少し遠くへ出かける、……さまざま挑戦することによって、昨年度よりちょっと成長できることを願っています。

左の絵は、平成29年度版の日誌「夏休み4」です。この表紙を飾っているのは、5年生の星井芽依さんが昨年度描いた絵です。夏休みを大いに楽しんでいるのが感じられます。今年の4年生の子たちが日誌をやるときに、わくわくしてきそうです。

### 高浜市 PTA 連絡協議会講演会

#### 演題「認める・つながる・広げる

#### —長い射程で「今」を考えてみる—

講師の六角先生は、高浜小学校や高浜中学校でも教べんを取られ、保護者の皆さまの中にも関わった方がいらっしゃると思います。平



【講師 六角英彰先生】

成27年3月、翼小学校長として退職されてからは、愛知教育大学講師として、教職に就く学生の指導に当たられています。その六角先生が、高浜市PTA連絡協議会研修会で講演されました。

## 「もう、兄のことなんか、どうでもいい。」

六角先生は、もともとは西尾・盛巖寺のご住職で、ときどき人の悩みごとを聞くことがあるそうです。ある時、兄に恨みのある男性が、死んだ兄を直送（弔いをせず、そのまま火葬）したいと言ってきたそうです。しかし、そうすれば兄への恨みが残ってしまう、せめて火葬場で弔いをしましよと、その人に勧めたそうです。どうしても許せない恨みがあったのでしょうか。しかし、恨む気持ちは自分の心の中にあり、恨み続けることで、その人は決して幸せになれません。どこかで、許し、認め、自分の心から恨みを消すことが必要だと感じました。

## 良い子に育ててほしい。だから私の言うことを聞け！

2歳になる子どもの子育てに神経の休まる暇がなく、イライラが虐待につながっていった母親の事例が紹介されました。部屋からの閉め出し、水風呂、トイレへの閉じ込めとエスカレート。子どもが苦しんでいる姿を見て、母親は「これで勝った。」と。しかし、虐待が終わり冷静になると自己嫌悪に陥ります。このように苦しんだ母親を救ったのは、ママ友でもなく、カウンセラーでもありませんでした。隣の部屋の年上の女性でした。彼女は、競争相手ではないので、母親に引け目はありません。彼女には経験があるだけに、母親の苦しみを理解してもらえます。子どもの同学年の横のつながりも勿論大切ですが、PTAや地域の年上の方とのつながりも、教えられることが多く、時に救いになると感じました。また、学校カフェのようなものをつくってはどうか、という提案を六角先生からいただきました。イベントではない、ただ集まるだけ、そこで来た人同士触れ合う、子どもと触れ合う、いかがでしょう。

## 大学生を教えている

成績優秀な学生だが、コースに行くだけでいいのか、幅がないし、遊びがないと感じているそうです。学生は、何でもすぐ答えを求めようとするそうですが、答えのない問題にぶつかり、自分で道を切り開いてほしいものです。大人が介入しすぎると、子どもの問題解決能力を伸ばせられないでしょう。混沌としたカオスの中から、自分の答えを見つけ出せる、たくましい子どもが育っていくことを願います。

## 「慈眼視衆生 福聚海無量」

これは、禅宗の白隠の教えだそうです。意味は、「優しい眼差しで、人々を見るならば、幸せが海のように無限に集まってくる」です。他者を認めると、自分も認められるようになり、幸せを得ることができるのでしょうか。成果を追い求めるだけでなく、人への優しい気持ちをもつことによって、幸せに生きることはできると教えてくれているようです。子どもたちのもこんな生き方をしてほしいと思いました。実は、校長室にこの書を飾っています。機会があればご覧いただきたいと思います。

## 誰も見ていなくても、自分が見ている

六角先生が習字の時間に、「馬」という字を子どもたちに習わせていると、中心がずれないように、どうしても、2画目の「一」から書く子が多いそうです。毛筆で大きな字を書くときは、六角先生は目をつむっていました。が、硬筆のときは正しい筆順で書くよう言いました。すると、子どもは「誰も見てないからいいじゃん。」、六角先生「でも、きっと誰かが見ているよ。」、そのとき、「仏様が見ている。」と子どもが答えるのを内心期待したそうです。ところが、ある子どもが「自分が見ているから、ごまかせん。」自分で自分を律することができることを改めて教えられたお話でした。



(文責 中川健二)